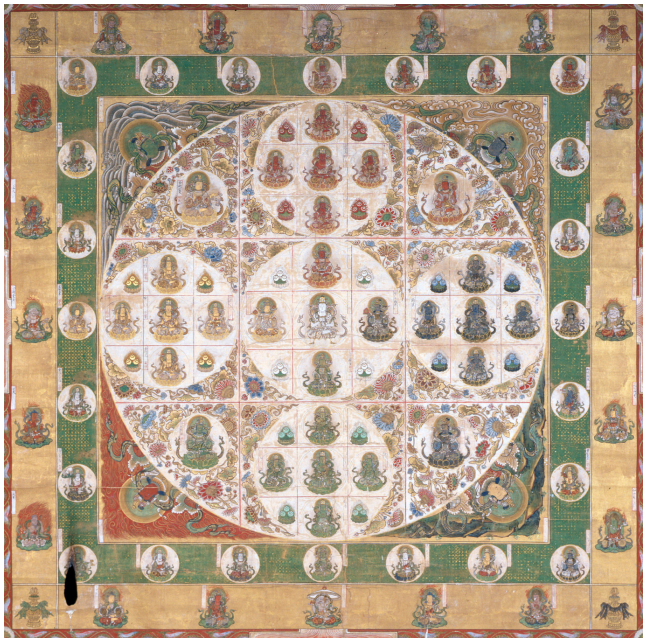
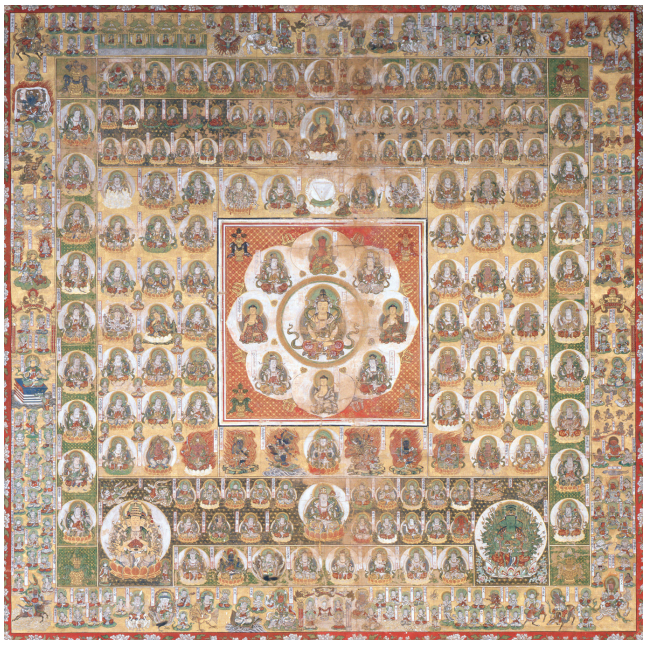


金剛界曼荼羅



胎蔵界曼荼羅

有形文化財（絵画）

１０．絹本着色両界曼荼羅図（けんぽんちゃくしょくりょうかいまんだらず）　２幅（ふく）一対

■指定年月日　昭和 44 年 2 月 6 日（1969）

■寸　　法　金剛界　縦 119.0㎝　横 119.7㎝
　　胎蔵界　縦 118.8㎝　横 120.0㎝

■所　在　地　上戸町寺社 11-41乙

■所　有　者　高照寺（こうしょうじ）

密教では、大日如来の徳を開き現したのが、宇宙の森羅万象（しんらばんしょう）そのものであると説き、その智と理をあらわすものとして、『金剛頂経（こんごうちょうぎょう）』に基づく金剛界、『大日経』に基づく胎蔵（たいぞう）界の両界曼荼羅が造立された。中国に渡って修行していた真言宗の宗祖空海（弘法大師）が、師の恵果（けいか）から授かり、日本に伝えた。

金剛界曼荼羅は、智拳（ちけん）印を結ぶ金剛界大日如来を中尊に配する成身会をはじめとして、9 会に区分し、1461 体の尊像を描く。九会（くえ）曼荼羅ともいい、西方に配する。金剛の由来は、大日如来の知徳は堅固で、すべての煩悩を打ち破るところから来ている。

胎蔵界曼荼羅は、法界（ほっかい）定印を結ぶ大日如来を中心とする中台八葉院（ちゅうだいはちよういん）を取り巻くように、13 台院におよそ 414 尊を描く。胎蔵は一切を含有する意で、胎蔵界諸仏の慈悲を象徴しており、東方に配する。

高照寺（こうしょうじ）蔵品は、室町期に描かれた優品で、享保 20 年（1735）に没した高照寺第 5 世、長快の記録「当寺什物帳」によると、鹿野（かの）村の十村（とむら）、恒方（つねかた）が寄進したものという。